

24615-2025100-10361

DELPHION**SelectCR****RESEARCH****PRODUCTS****INSIDE DELPHION****Logout** **My Account****Logout** **My Account****Logout** **My Account**

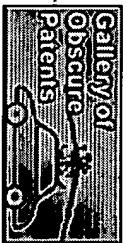
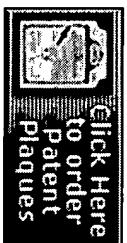
Search: Quick/Number Boolean Advanced Derwent Help

 [Create new Work File](#) [Add](#)Get Now: [PDF](#) | [More choices...](#)View: [Jump to](#) Tools: [Add to Work File](#) [Create new Work File](#) [Add](#)
 [Email this to a friend](#)

Title:	JP60078529A2: DOUGH SHEET			
Country:	JP Japan			
Kind:	A2 Document Laid open to Public inspection			
Inventor:	OOTA YOSHINORI; INOUE SEIJIROU;			
Assignee:	KYOWA HAKKO KOGYO KK News , Profiles , Stocks and More about this company			
Published / Filed:	1985-05-04 / 1983-10-07			
Application Number:	JP1983000187757			
IPC Code:	A21D 8/04; A21D 2/26;			
ECLA Code:	None			
Priority Number:	1983-10-07 JP1983000187757			
Family:				
PDF	Publication	Pub. Date	Filed	Title
<input checked="" type="checkbox"/>	JP60078529A2	1985-05-04	1983-10-07	DOUGH SHEET
1 family members shown above				

High
Resolution

Other Abstract Info:	None
-----------------------------	------



[Nominate this for the Gallery...](#)

Powered by **Verity**

THOMSON
*
SEARCH

[Subscriptions](#) | [Web Seminars](#) | [Privacy](#) | [Terms & Conditions](#) | [Site Map](#) | [Contact Us](#) | [Help](#)

Copyright © 1997-2005 The Thomson Corporation

⑨ 日本国特許庁 (JP) ⑩ 特許出願公開
⑫ 公開特許公報 (A) 昭60-78529

⑤Int.Cl.⁴

A 21 D 8/04
2/26

識別記号

庁内整理番号

6712-4B
6712-4B

③公開 昭和60年(1985)5月4日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

④発明の名称 生地

⑪特 願 昭58-187757

⑫出 願 昭58(1983)10月7日

⑬発明者 太田 恵教 狛江市岩戸北3-6-17

⑭発明者 井上 誠二郎 町田市旭町3-6-6

⑮出願人 協和醸酵工業株式会社 東京都千代田区大手町1丁目6番1号

明細書

1. 発明の名称

生地

で上げ、又は、蒸煮後の食味品質低下の抑制等が強く要望されている。

これ等の要望に対して、乳化剤、澱粉、蛋白質等の添加が行われている

2. 特許請求の範囲

フォスフォリバーゼAを小麦粉1Kgあたり150単位以上含有する
小麦粉生地。

が、まだ十分な効果を発揮する技術は開発されていない。

澱粉、特に小麦粉の食品加工適性について検討の結果、澱粉中の

3. 発明の詳細な説明

本発明はフォスフォリバーゼAを小麦粉1Kgについて150単位以上含有する(以下、PL-Aと略称する)生地に関する。

リン脂質にPL-Aを作用させることにより得られる生地の性質、澱粉

のめん類加工適性が向上し、製品品質が改善されることが見い出され

た。即ち、PL-A添加により、生地の機械耐性が改善されこの生地を

用いてめん類を製造しためんの加熱時の歩留りが向上し、加熱後のめん

の食感が改善される。この改善効果を発現するのに必要なPL-Aの量

は、後に記載する活性測定法で、原料粉1Kgあたり150単位以上、

望ましくは200単位以上である。

めん類は代表的な澱粉食品の1つである。近年その生産、流通、消費

PL-Aはいずれのものも用いうるが動物のすい臍から製造されるバ

形態等の変化に伴い、めん類の製造にはいくつかの改善が要望されてい

ンクレアチン製剤を、PL-A原料として使用できる。いくつかの市販

る。例えば、大量機械生産の際のめん生地への機械耐性の付与、茹でる時

パンクレアチン製剤のPL-A活性を測定した結果を、第1表に示す。

第1表

パンクレアチニン製剤 (製造者名)	PL-A活性 (単位/g)
No. 1 (東京化成)	1000
No. 2 (ノボ)	560
No. 3 (協和マイルズ)	960
No. 4 (極東製薬)	310

市販のパンクレアチニン製剤中にはプロテアーゼが一般に含まれているがこの酵素は生地及びめんに悪影響を及ぼす。即ち、生地の機械耐性も、めんの食感も低下する。従って、市販パンクレアチニン製剤を使用する場合には、あらかじめプロテアーゼを失活させておくことが必要であり、これは、パンクレアチニンを酸性下で加熱することにより達成される。その条件は次の通りであるが、この範囲外でも実施可能である。

パンクレアチニン濃度 : 1.0 ~ 2.0 (w/w) %
pH : 1.5 ~ 4.0
加熱温度 : 70 ~ 90 °C
加熱時間 : 10 ~ 40 分

特開昭60-78529(2)

現在、めん類の品質改良剤として、レシチンが使用されているが、これ

はPL-Aの基質であり、穀類粉中のリン脂質と同様に、PL-Aの作用を受ける。従って、本発明の実施形態の1つとして、レシチンとPL-Aとを併用すると、PL-Aの改良作用はより強化される。

本発明で使用するPL-Aの工業的原料であるパンクレアチニン製剤をバスク類の製造に使用し、彈力性に富み、粘着性の少ないバスク類を得る方法が、米国特許3,520,702 (1970) に開示されている。それによれば、パンクレアチニンの添加量は小麦粉1kgあたり、2 ~ 100 mgで、最も有効な添加量は25 mgであるとされている。先に挙げた第1表から明らかなように、最もPL-A活性の高いパンクレアチニン製剤を使用しても、その酵素活性量は、最も有効な添加量である25 mgを用いた場合、2.5単位であり、本発明の効果を得るには、はるかに不十分である。また先に記述したように、PL-A活性量として150単位以上に相当する量のパンクレアチニン製剤を、酸性加熱処理なしにそのまま用いると、生地及びめんの品質は、無添加の場合よりもむしろ低下する。

本発明で採用したPL-A活性測定法は次の通りである。

(1) PL-A活性測定法

本活性測定法は、基質に精製大豆リン脂質混合物を用い、酵素反応によって生成する遊離脂肪酸を、市販の遊離脂肪酸定量キットを用いて定量することに基づく。

第1表に酵素反応液組成を示す。基質であるリン脂質の溶液は、精製大豆リン脂質混合物 (ツルーレシチン社製、商品名SLP-ホワイト) の2% (w/v) 水分散液を高速回転ホモジナイザーで分散させて調整した。

第1表

A 0.1% (w/w) PL-A溶液	0.2 mL
B 0.1M塩化カルシウム水溶液	0.1 mL
C 0.2M酢酸-酢酸ナトリウム緩衝液 (pH 5.5)	0.5 mL
D 脱イオン水	0.2 mL
E リン脂質水分散液	1.0 mL

A, B, C及びDの混合液を30 °Cで5分間予備加温した後、同じく30 °Cで予備加温したEを加え、30 °Cで酵素反応を進行させる。10

分後、沸騰水中で15分間加熱して反応を停止させる。反応液20 μL中に含まれる遊離脂肪酸は、デタミナーNEFA (協和メデックス社製) を用いて定量する。PL-A活性の定義は、1分間に1 μMの遊離脂肪酸を生成する酵素活性を1単位とした。

以下に実施例を示す。

実施例 1.

第2表に示す处方を用い、第3表に示した3種類のうどんを常法により試作した。

第2表

中力小麦粉	9800 g
食 塩	200 g
水	3300 g

第3表

No. 1	対照試験区 (無添加)
No. 2	対照試験区 (未加熱パンクレアチニン4 g添加)
No. 3	本試験区 (PL-A 8 g添加)

パンクレアチンは豚パンクレアチン(協和マイルズ製)を用いた。PL-Aとしては、10% (w/w) パンクレアチン分散液を塩酸でpH3.5とした後、75℃で20分間加熱し冷却後、パンクレアチンと同量の乳糖を加えて凍結乾燥したもの用いた。酵素活性は490単位/gである。

No. 1の生地に比較して、No. 3の生地は彈力性に富み、かつ、伸展性に優れ、めんにしたときのめん切れのないめん帯を形成し、機械耐性の良好なめん帯となった。これに対して、No. 2の生地は軟かすぎ、しかも粘着性のあるめん帯となり、No. 1の生地よりも機械耐性に劣っていた。

得られたうどんを、それぞれ98℃で10分間茹でた後、流水で冷却し、その歩留りを測定した。その結果は第4表に示すように、No. 3のうどんが最も高い歩留りを示し、No. 2が最も低かった。

第4表

うどん	歩留り(%)
No. 1	285
No. 2	270
No. 3	300

また、うどんにスープを加えて、その食感を専門パネルにより評価した。

No. 3のうどんが最も歎たえに優れていた。これに対して、No. 2のうどんは軟かすぎて、最も劣っていた。

実施例 2.

第5表に示す处方を用い、第6表に示した3種類の中華めんを試作した。

第5表

半強力小麦粉	9850g
かん水(粉末)	100g
食塩	50g
水	3000g

第6表

No. 4	対照試験区(無添加)
No. 5	対照試験区(未加熱パンクレアチン4g添加)
No. 6	本試験区(PL-A 8g添加)

パンクレアチン及びPL-Aは、実施例1.と同じ標品を用いた。

No. 4の生地に比較して、No. 6の生地は引張りに強く柔軟性に富んだめん帯を形成し、めん帯の切れも生ぜず、優れた機械耐性を示した。これに対して、No. 5の生地は、彈力性が失われ粘着性のあるめん帯となり、No. 4の生地よりも機械耐性に劣っていた。

得られた中華めんを98℃で3分間茹煮後、スープを添加し、専門パネルによりその食感を評価した。更に、1時間室温に放置後、再度食感を評価した。その結果、いずれの場合も、No. 6の中華めんが最も歎たえがあり、彈力性に優れていた。これに対して、No. 5の中華めんは最も劣っていた。

特許出願人(102) 協和醸酵工業株式会社

代表者 木下祝郎



⑪ 公開特許公報 (A) 昭60-78529

⑫ Int. Cl. 4

A 21 D 8/04
2/26

識別記号

府内整理番号

⑬ 公開 昭和60年(1985)5月4日

6712-4B
6712-4B

審査請求 未請求 発明の数 1 (全3頁)

⑭ 発明の名称 生地

⑮ 特願 昭58-187757

⑯ 出願 昭58(1983)10月7日

⑰ 発明者 太田 恵教 狛江市岩戸北3-6-17

⑰ 発明者 井上 誠二郎 町田市旭町3-6-6

⑰ 出願人 協和醸酵工業株式会社 東京都千代田区大手町1丁目6番1号

明細書

1. 発明の名称

生地

で上げ、又は、蒸煮後の食味品質低下の抑制等が強く要望されている。

2. 特許請求の範囲

フォスフォリバーゼAを小麦粉1Kgあたり150単位以上含有する

これ等の要望に対して、乳化剤、澱粉、蛋白質等の添加が行われているが、まだ十分な効果を発揮する技術は開発されていない。

小麦粉生地。

澱粉、特に小麦粉の食品加工適性について検討の結果、澱粉中の

3. 発明の詳細な説明

本発明はフォスフォリバーゼAを小麦粉1Kgについて150単位以上含有する(以下、PL-Aと略称する)生地に関する。

リン脂質にPL-Aを作用させることにより得られる生地の性質、澱粉

該生地からめん類例えばうどん、そば、中華めん、マカロニ、スパゲ

粉類加工適性が向上し、製品品質が改善されることが見出され

ティ又、ぎょうざ、しゃうまいの皮等調製すると優れた効果を奏する。

た。即ち、PL-A添加により、生地の機械耐性が改善されこの生地を

めん類は代表的な澱粉食品の1つである。近年その生産、流通、消費

用いてめん類を製造しためんの加熱時の歩留りが向上し、加熱後のめん

形態等の変化に伴い、めん類の製造にはいくつかの改善が要望されてい

の食感が改善される。この改善効果を発現するのに必要なPL-Aの量

る。例えば、大量機械生産の際のめん生地への機械耐性の付与、茹でる時

は、後に記載する活性測定法で、原料粉1Kgあたり150単位以上、

時の溶出固形分の低下による歩留りの向上と廃水汚染の軽減、さらに茹

望ましくは200単位以上である。

での活性が向上する。

PL-Aはいずれのものも用いられるが動物のすい臍から製造されるバ

ンクレアチン製剤を、PL-A原料として使用できる。いくつかの市販

パンクレアチン製剤のPL-A活性を測定した結果を、第1表に示す。

第1表

パンクレアチン製剤 (製造者名)	PL-A活性 (単位/g)
No. 1 (東京化成)	1000
No. 2 (ノボ)	560
No. 3 (協和マイルズ)	960
No. 4 (極東製薬)	310

市販のパンクレアチン製剤中にはプロテアーゼが一般に含まれているがこの酵素は生地及びめんに悪影響を及ぼす。即ち、生地の機械耐性も、めんの食感も低下する。従って、市販パンクレアチン製剤を使用する場合には、あらかじめプロテアーゼを失活させておくことが必要であり、これは、パンクレアチンを酸性下で加熱することにより達成される。その条件は次の通りであるが、この範囲外でも実施可能である。

パンクレアチン濃度 : 1.0~2.0 (w/w) %
pH : 1.5~4.0
加熱温度 : 70~90°C
加熱時間 : 10~40分

特開昭60-78529(2)

現在、めん類の品質改良剤として、レシチンが使用されているが、こ

れはPL-Aの基質であり、麺類粉中のリン脂質と同様に、PL-Aの作用を受ける。従って、本発明の実施形態の1つとして、レシチンとPL-Aとを併用すると、PL-Aの改良作用はより強化される。

本発明で使用するPL-Aの工業的原料であるパンクレアチン製剤をバスク類の製造に使用し、彈力性に富み、粘着性の少ないバスク類を得る方法が、米国特許3,520,702 (1970) に開示されている。それによれば、パンクレアチンの添加量は小麦粉1kgあたり、2~100mgで、最も有効な添加量は25mgであるとされている。先に挙げた第1表から明らかなように、最もPL-A活性の高いパンクレアチン製剤を使用しても、その酵素活性量は、最も有効な添加量である25mgを用いた場合、2.5単位であり、本発明の効果を得るには、はるかに不十分である。また先に記述したように、PL-A活性量として150単位以上に相当する量のパンクレアチン製剤を、酸性加熱処理なしにそのまま用いると、生地及びめんの品質は、無添加の場合よりもむしろ低下する。

本発明で採用したPL-A活性測定法は次の通りである。

(1) PL-A活性測定法

本活性測定法は、基質に精製大豆リン脂質混合物を用い、酵素反応によって生成する遊離脂肪酸を、市販の遊離脂肪酸定量キットを用いて定量することに基づく。

第1表に酵素反応液組成を示す。基質であるリン脂質の溶液は、精製大豆リン脂質混合物 (ツルーレシチン社製、商品名SLP-ホワイト) の2% (w/w) 水分散液を高速回転ホモジナイザーで分散させて調整した。

第1表

A 0.1% (w/w) PL-A溶液	0.2mL
B 0.1M塩化カルシウム水溶液	0.1mL
C 0.2M酢酸-酢酸ナトリウム緩衝液 (pH 5.5)	0.5mL
D 鹿イオング	0.2mL
E リン脂質水分散液	1.0mL

A, B, C及びDの混合液を30°Cで5分間予備加温した後、同じく30°Cで予備加温したEを加え、30°Cで酵素反応を進行させる。10

分後、沸騰水中で15分間加熱して反応を停止させる。反応液20μL中に含まれる遊離脂肪酸は、デタミナ-N E F A (協和メドックス社製) を用いて定量する。PL-A活性の定義は、1分間に1μMの遊離脂肪酸を生成する酵素活性を1単位とした。

以下に実施例を示す。

実施例 1.

第2表に示す处方を用い、第3表に示した3種類のうどんを常法により試作した。

第2表

中力小麦粉	9800g
食 塩	200g
水	3300g

第3表

No. 1	対照試験区 (無添加)
No. 2	対照試験区 (未加熱パンクレアチン 4g添加)
No. 3	本試験区 (PL-A 8g添加)

特開昭60- 78529 (3)

また、うどんにスープを加えて、その食感を専門パネルにより評価した。

No. 3のうどんが最も歎かれていた。これに対して、No. 2のうどんは歎かすぎて、最も劣っていた。

実施例 2.

第5表に示す处方を用い、第6表に示した3種類の中華めんを試作した。

第 5 表

半強力小麦粉	9850 g
かん水 (粉末)	100 g
食 塩	50 g
水	3000 g

第 6 表

No. 4	対照試験区 (無添加)
No. 5	対照試験区 (未加熱パンクレアチン 4 g 添加)
No. 6	本試験区 (PL-A 8 g 添加)

パンクレアチン及びPL-Aは、実施例1.と同じ標品を用いた。

第 4 表

うどん	歩留り (%)
No. 1	285
No. 2	270
No. 3	300

No. 4の生地に比較して、No. 6の生地は引張りに強く柔軟性に富んだめん帯を形成し、めん帯の切れも生ぜず、優れた機械耐性を示した。これに対して、No. 5の生地は、彈力性が失われ粘着性のあるめん帯となり、No. 4の生地よりも機械耐性に劣っていた。

得られた中華めんを98℃で3分間蒸煮後、スープを添加し、専門パネルによりその食感を評価した。更に、1時間室温に放置後、再度食感を評価した。その結果、いずれの場合も、No. 6の中華めんが最も歎かれていた。これに対して、No. 5の中華めんは最も劣っていた。

特許出願人 (102) 協和醸酵工業株式会社

代表者 木下祝郎

